

PONTE

書くジャグリングの雑誌：「ポンテ」

通巻第四号



撮影者：青木直哉 於 FINNISH DIABOLO CONVENTION 2012

今号の記事

- ・ 編集長近況
- ・ ピザとジャグリングの架け橋 ポンテ 未来のピザ回しはシガーボックス?! (後編) そいそい
- ・ 海外ジャグリング紀行 (3) FDCのこと。 青木直哉
- ・ 編集部より

編集長近況

二週間って、あつというまでですね。これから隔週発刊をずっと続けていくのかと思うと、大学に入学したような気分になります。

卒論の余韻が少しずつ消えてきて、ジャグリングで書くことが生活の一部に変化している感じ。今号の寄稿は、そいそいのみです。

ピザとジャグリングの架け橋^{ポンテ} (2) 未来のピザ回しはシガーボックス?! (後編)

そいそい

前回、「未来のピザ回しがシガーボックスのように抽象化された道具になるのだろうか」、という問いに対し「イエスであり、ノーでもある」という筆者の考えを提示させてもらった。まず、イエスである根拠について。筆者自身ピザ回しという奇異なオブジェクト・マニピュレーションに携わってきて、ピザという道具が、意外にも技術的な広がりがあり、それにも関わらずまだまだ未開拓な技術の分野がたくさんあることに気づいてきたのだ。ピザは指回しだけでなく、トスもできるし、ポイのようにスイングさせることもでき、かつコンタクトジャグリング的な(もっと具体的に言うとハットジャグリング的な)転がす動きもコンタクト(やハット)に比べてよりアグレッシブにできる。さらに、手元で自由に操れる時間が長いので、スピードの調節も自分の意思で自在にでき、即興で音楽に合わせて演技することも比較的容易である。スポーツジャグラー達がこの多大な可能性を掘り起こしてくれたら、ピザといういかにも感から脱してピュアなスポーツの分野になるのではないかと筆者はある程度の楽観も含めて期待しているところである。また、ピザ回しはそのいかにも感のあるイメージから一歩離れて見てみると、実は柔らかい物体を操る運動であると見ることができる。ある程度の質量があり、静止時にある程度形が整っており、かつ力を加えた時に様々に形を変える柔らかい物体(例えば正方形や円形、長方形でも一辺の長さがもう一辺のそれとさほど変わらないものなど)であればよく、それらの条件が整えばピザ回しの技術は応用可ジャグリングのことばのために

能となるのだ。例えば座布団回しなどに代表される布回し。筆者は風呂上がりバスタオルを回して乾かしてみたりすることがあるのだが、バスタオルにもピザ回しで使う技の一部が適用できたりする。以上の点より、ピザ回しが単にピザという具体性の高いものに留まらず、応用範囲の広いパフォーマンスになり得ると思う。が、しかし、ピザ回しは具体性に富むパフォーマンスだからこそいい点もまたあるのである。ピザ回しを食べ物のピザと結びつけるのは、ピザ回しという具体性の高さのなせるわざである。この絆があればこそ、ピザ回しはピザの大会の一部門として成立し、ピザ職人たちが腕を競うことができる。それにピザ屋でピザ回しを見る機会に恵まれた人が、一見ピザと何の関係もない小麦の塊をピザと認識し楽しむことができるのは、「ピザ職人が」回している物体だからに他ならない(ピザ回しの具体性の高さはピザ職人がやっているという一般認識に担保されている部分もまた大きいのである)。ところで時々、この具体性の高さ故に「食べ物を回すな」という手厳しいご意見を頂戴することがあるのだが、実はピザ職人たちが回すピザ生地は食べ物とは違った配合でできた特別丈夫なものである、ということをご存知だろうか? 別にあれば食べるわけではなく、あくまでパフォーマンス用のものである。ピザだけどピザではないのだ。すぐに破けないように硬くなっており、せっかくパフォーマンス用にあらかじめ伸ばしておいても、セッティングした瞬間から縮んでいく。そのくせ扱っていくうちに伸びていって、仕舞いには破けてしまう、というなんとも気まぐれな道具である。その気まぐれな道具に習熟したピザ職人の手さばきは見事なもので、ピザを破かないために身につけた動きは本当に滑らかで、ラバーで身につけた動きとはまた違った綺麗さがある。本物の生地を扱うのだけで、おそらく5ボールカスケードくらいには難しく、しかも一回破けたらもう使い物にならなくなる、というジャグリングナイフもびつくりのハラハラ具合だ(あくまで競技者本人にとっては、だが)。筆者本人も実際イタリアで触らせてもらう機会があったが、一枚あたり10秒も持たなかった。ピザ職人はこの生地を1枚あたり30秒から1分は回し続けるのだから驚きである。以上述べたことより、以下の結

論を導けるのではないだろうか。シガーボックスのように言葉の原義から離れてスポーツ的にも発展し得る余地が多分にあり(ラバーを使って)、さらにピザという具体性から離れて技術を別のより抽象的な道具に応用できるという可能性もある、ということ。逆に具体性の高さを保ったままで(小麦の生地を使って)別の方向でその技術を高めていくこともできる、ということ。ピザ屋での余興はピザ回しこそふさわしく、具体性の縛りのなかで最も生き生きと映えるパフォーマンスになり得るとのこと。...という感じだろうか。終わりに、現在のピザ回し界での筆者の位置づけだが、従来のピザ職人たちによる第一世代のピザ回しから少し離れた、スポーツ的とも断言し難い第二世代にいる、というのが個人的な認識である。ピザ回し界というのが、日本という土壌で、多様性という面で今一番面白くなりつつある、とここで言うて今回は終わりにしよう。

☆ピザ回し専用ラバーはネットショップ『ピザ回しドットコム』が世界各国から輸入・販売しているので、下記フィンランドのリンクからどうぞ。

<http://pizzamawashi.com/>

☆次号、イタリア取材の為本編はお休みして、旅行記を書けたら書きます。 ■

海外ジャグリング紀行 (3) FDCのこと。

桜も少しずつ咲き始めて春も近いと言えど、まだ寒い日の続く今日この頃。イタリア留学時代にFDCというフィンランドのディアボロ大会に参加してきたときの話である。昔書き溜めていたものを改変、大幅加筆して掲載。

*

2012年の夏に、フィンランドのディアボロ大会に行ってきた。日本にいるときはフィンランドの大会に行くなどということはまず考えもしなかったが、イタリアになると、ヨーロッパのどこへ行くにも大概簡単なので、足が軽い。ローマ空港まで家から4時間くらい。そこから3時間半のフライトで、ヘルシンキ。うまく格安航空を取れば、2から3000円でチケットを取れたジャグリングのことばのために

りする。(他にも諸費用がかかるから一概に格安と言えないときもあるが)

そんなふう、気軽に国を移動した例がこれである。始まりは、まず4月に行われたBJCというイギリスのジャグリング大会でMarkoマルコというフィンランド人と友達になったこと。そのときは「フィンランドでディアボロオンリーの小さな大会があるから！」とだけ教えてもらっていた。その時点では期間中にクロアチアに友達を訪ねに行くことになっていたため、「うん、覚えておくよ」とだけ言って流しておいた。

時は流れ8月。ポーランドでのEJC中。facebookを通して、フィンランド人からメッセージがくる。

「マルコだよ！覚えてる？実はFDCのことなんだけど...」

と、イギリスで話した大会のことを持ち出してくる。なんでも、呼ぶ予定だったゲストの一人が膝に怪我をしてしまったらしい。そこで演技ができる代理を探しているとのこと。BJCで私の演技をみていたマルコは、こいつなら呼んでもいいかと判断してくれたのか、私のところに声をかけてきたのである。しかもこの時点で、急遽友達がクロアチアに来られないことになり、旅行は中止になっていた。というわけですぐにフィンランド行きを決めた。

しかしよく聞くとスケジュールが過密。主催者のSamuliサムリ(ジャグラー、サカリ・マンニスト氏の兄弟)が言うところによると、EJCが終わってイタリアに帰ったら(8月7日)まず8月8日の夜中の便でイタリアからヘルシンキに飛ぶ。間髪入れずに空港から出ている長距離バスに乗る。バスに乗るとTampereタンペレという街まで2時間くらいで着くから、着くなりそのままサムリの知り合いの家に行く。(到着は早朝3時半くらい)朝10時くらいにマルコが迎えに行くから、それまで適当に寝ている。

「遅いけど、若いから大丈夫でしょう」

とのこと。まあいいけどさ。気合いを入れて結局このプランを承諾した。というわけでEJCが終わった次の日の8月7日、朝っぱらに格安航空でワルシャワからイタリアへ。7日昼にはローマフィウミチーノ空港に到着する

も、荷物の入れ替えをするためにシエナに一旦帰ってから、次の日8日夕方にはまたフィウミチーノ空港に。そんなこんなでしばらく待って飛行機に乗る。今回はなんとフィンエアー。これは贅沢便。ライアンエアーやイージージェット（いわゆるLCC、格安航空）に慣れた私は、思わず「荷物の預け入れはできますよね？」と尋ね、機内食が出ることに喜び、コーヒーがただで飲めることに感涙した。3時間ほどでヘルシンキに到着。空港にはIKEAの家具のような、いかにも北欧テイストの設備が並び、よくわからないがかわいい大きなオブジェなどもある。



ここまで予定通りのスケジュール。予定通りだがなかなか疲れる。疲れるのはいいのだが、何より格好を間違えた。半袖半ズボンにサンダルという南の島に行く格好で、トナカイのいる雪国フィンランドに来てしまった。いくら夏とはいえ、寒い。おかしい。寒いよフィンランド。まあ夜着いたというのもあるのだろうが。8月初旬で、秋ぐらいの寒さ。とにかく早く温もりたい一心でひたす



↑タンペレ

らタンペレへと向かった。

タンペレに着くと、バスを降りたところで、背の高い静かなたたずまいののっぺりとした男性が迎えてくれた。名をJussiユッスイという。はじめましてのあいさつをしたあと、「いやあ、眠いよ」くらいのことを言ったり、あとは最低限の説明をしてさっさと家に向かい、ベッドの場所を教えて、自分はそそくさと寝にいつてしまった。だがそれも道理で、夜中までの仕事のあと早朝にわざわざ起きだして来てくれて、しかも仮眠をとったまま



↑泊めてもらった、ユッスイの家

た仕事だという。ありがとうございました。

マルコが車で迎えにきて、はじまる、FDC。会場は人里離れたところにあるErajarviエラヤルヴィという村の小学校。小さな小さな村の小学校。全校生徒は十人くらいじゃないかと思えるほど小さい。その、小さな小さな体育館でみんなでディアボロを練習する。毎年会場は変わらずここなんだそう。規模も噂通り30人ぐらいだし、寝る場所は適当だし、（私は奥まった部屋の筋トレ器具の下で寝た）主催者のお母さんがなぜか手伝いに来るし、でもおいしいケーキを置いていつてくれるし、特にスケジュールが決まっていない日もあるし、合宿のような大会だった。しかしゲストは豪華で、内容も実はなかなか濃い。かの有名なフランスのディアボリストEtienne Chauzyエティエンヌ・ショズィー。それにフィンランド国内からはJoonaヨーナ、Eljasエリアスといった、ディアボロをやっている人なら一度はビデオをみたことがあるような凄腕たちが名を連ねる。

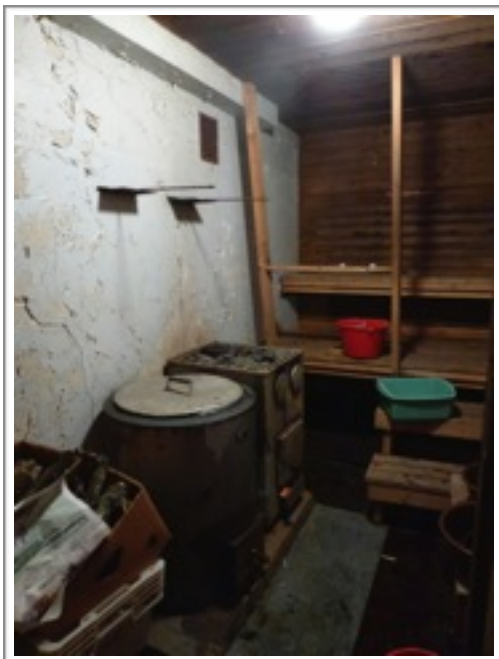
気になる内容も、Diabolothonディアボロソンという、前代未聞のディアボロススポーツ大会や、Diabolo MODコンテストなる、手作りディアボロ品評会など、面白いも



↑ディアボロソン、バータックス400mラン

のがいっぱい。中でもMODコンテストでは、飛び入り参加のタマネギと鉛筆を利用した「画期的な」ディアボロも出てきて、腹が割れるほど笑った。

初日の夜には、会場から歩いていける（徒歩で30分くらいかかる）サウナにも行った。サウナはフィンランド発祥のものである。さすが本場、設備も風情あるもので、木造の建物から、火を焚いて石を温める釜、照明に使うキャンドルまで、まさに思い描いていたような「本物のフィンランド」の姿だった。サウナで十分温まった後に、はだかで湖に飛び込んだのもいい思い出である。



↑サウナ内部。左にあるのが薪釜。皆ビールを飲んだりしている。

その日は満月の夜だったから、シュールな夢を見ているような気分だった

なおついでながら、最終日のガラショーで演技もした。（一応これのために来たので）ガラショーを行ったのは、ジャグリングのこぼのために

体育館から少し離れたこれまた小さな劇場であった。小さすぎて振り回したスティックが後ろの壁に当たるほどだったが、なんとか演技をこなして、仕事を終えた。

他にもワークショップや、ショップ販売などのイベントもあったが、暇な時間はギターヒーローをやったり、近所の（往復40分近くかかる）スーパーに行ったりしながら、のんびりとした、しかし充足した時間を過ごした。

大会が終わった後、一日だけ観光をしてから帰る時間があった。

好きにしているよ、といわれた。しばし悩んだ結果ヘルシンキの観光を選ぶことにした。他にも小さな町タンペレ観光（タンペレは第二の都市らしいが）や、ヘルシンキに向かうどこかの街で途中で降りるなどという選択肢もあったのだが、首都たるヘルシンキを未だ空港しかみていないということに気づいたので、ヘルシンキを案内してもらうことにしたのである。

ヘルシンキには、もともと憧れがあった。稲垣美晴さんという、現在は猫の言葉社という会社の代表をなさっている方が書いたフィンランド留学期『フィンランド語は猫の言葉』という本を読んで以来、一度は行ってみたいかったところであった。またデザインにも関心があるから、街中が凝った建築で溢れるヘルシンキを、この足で歩いてみたかった。実に、期待通りの綺麗な街だった。FDCに来ていたTalviタルヴィという女性に案内してもらったのだが、本当に楽しかった。



↑はしゃぐタルヴィさん

フィンランドにもサーカス学校は存在し、トゥルク応用科学大学のサーカス学部というものがある。タルヴィはそこに通っている。さすが彼女は身体もしっかりして

いて性格も明るく、空が澄み渡った、少し肌寒いヘルシ
ンキの明るさに似合った、一緒にいて楽しい人だった。

やっぱりジャグリングを通して海外に行ったりなんだ
りするけれども、結局のところ、人と出会うのが楽しく
てやめられない、というところは、ある。マルコに日本
語を教えた思い出も、サムリのお母さんの手作りタルト
の味も、町中でバスケットをしていて、終わった後に服を脱
ぎ捨てて海に飛び込んでいったトンミさんと、タルヴィ
の彼氏のヨウニさんの爆発するエネルギーも、僕の中で
のフィンランドという国と、ジャグリングの周辺を灯す
光である。 ■



↑手作りタルト。これは非常に美味しかった。ママの味。

編集部より

記事募集のお知らせ

寄稿を受け付けています。基本的にはこちらから声を
かける場合が多いですが、「こんなものを書きたいぞ」
という相談から、「こんなものを書いたぞ」という、引
き返しの出来ない挑戦まで、なんでも下記のアドレスに
連絡か、直接どうぞ。次号発刊は4月7日（月）寄稿締
め切りは4月4日（金）23:59。 ■

jugglerna@gmail.com

ponte 編集長 青木直哉

次号予告

またもや予告が実現しなかったのが、今回はもう予告
しません。シンガポールか、また何か別のことになるか
な。ううむ。とにかく、お楽しみに。 ■

ポンテは公式サイトでご覧になれます。

書くジャグリングの雑誌：ponte

<http://jugglingponte.tumblr.com>